

先週は、大齋節の最初の日曜日でした。大齋節というのは、最初はその年のイースター、復活日に洗礼を受ける人のために設けられた、修行の期間でした。今日の福音書は、ファリサイ派であり、ユダヤ人の議員だったニコデモが、イエス様に質問して、イエス様はそれに答えられ、『神の国に入るためには、水と霊によって、新たに生まれなければならない』ということが語られるところです。この箇所は、洗礼堅信式が、日曜日ではなく、週日に行われる時などに読まれる箇所です。大齋節の目的に合った箇所だと言えるでしょう。私たち聖公会では、洗礼を受けるとき、洗礼名をつけるのが一般的ですが、それは、今までの自分とは違う、別の存在に生まれ変わったんだ、ということを表しています。

私は、生まれて4ヶ月余りで、赤ちゃんの時にフランシスという名前を付けられました。幼児洗礼だったわけです。もの心ついていない子どもに洗礼を授けることに、意味があるのか、という批判がありますが、新たに生まれる、ということを考えて、神様の前で誇るものがないほうが、クリスチャンになるのに都合がいいような気がします。そういう意味で私は、幼児洗礼は認められていいと思います。

今日の旧約聖書には、イスラエルの信仰の父アブラハムが、まだ「アブラム」と名乗っていた頃、神様に呼ばれて、生まれ故郷から旅立った話が出てきました。そして、アブラハムの素晴らしさは、今日の使徒書によれば、誇ることがあったからではなく、素直に神様の声に聞き従うということ、パウロの言葉を借りれば、「律法によってではなく、信仰によって」義とされる。「神様との関係が正しいものと認められる。」ということです。

今日の使徒書を書いた、パウロという人については、みなさん、どんな人かご存知でしょう。彼は、生まれて8日目に割礼を受けて、律法に関してはファリサイ派の一員、熱心さの点では教会の迫害者、律法の義については、非のうちどころのない者だったのです。しかし、自分にとって有利であったこれらのことを、キリストのゆえに損失と見なすようになりました。そればかりか、主キリスト・イエスを知ることのあまりのすばらしさに、今では他の一切を損失と見ています。キリストのゆえに、彼はすべてを失いましたが、それらを塵あくと見なしている、とフィリピの信徒への手紙3章で語っています。(このことについては、西南学院の青野太潮先生が「パウロ」という本を岩波新書から、昨年末に出版されています。教会の本棚に置いているので読んでください。)

今までの輝かしい経歴を、彼は意味のないもの、というより、逆にキリストへの信仰については、それらが損失、あると邪魔になる、という見方をパウロはしているのです。

皆さんは、そう言うパウロの気持ちが理解できますでしょうか。

8年前に亡くなった私の父は認知症で、母が数年苦勞していました。風呂に入るように言っても入らないし、下着が汚れても、なかなか履き替えてくれません。自分のことは自分の思うようにやりたいらしく、なかなか母の言うことを聞きません。私が福山に帰った時などは、私が押さえつけて、やっと着替えさせられるので、最後頃は着替えのためだけに、母は手伝いを頼んでいたようでした。素直に従ってくれたら、どれだけ母も楽になったか、と思いましたが、頑固でそれができませんでした。

どうも、自分にプライドがあるような人は、介護する人を困らせる傾向があるようです。私の父は、決して社会的地位が高かったわけではないのですが、「自分はクリスチャンだ」ということを意識して、プライドが高くて、なかなか相手に委ねることができなかつたようなのです。

私は最近、感じているのですが、クリスチャンになる、というのは、プライドを持つことではなく、介護するキリストに、全部任せてしまって、右手を上げろ、と言われたら上げるし、左足を上げろ、と言われたら上げる、そういうことではないか、と思うのです。何のプライドもなく、「よろしく願います」と相手の言うことにそのまま聞き従うなら、いつまでも嫌な思いを続ける必要がないのです。

ところが、パウロにしても、また、今日の福音書に出てくる、ニコデモのような、律法を堅く守っているユダヤ教の教師、そして身分の高い議員となりますと、プライドとか、周囲の眼を気にして、素直に従わない。「自分はこれこれのことをやった。」と自慢しているうちは、神様の側では、まったくその人を通しては、仕事ができないわけです。

福音書に登場したニコデモは、高い地位のために、周囲の眼を気にして、昼間は行動するわけにはいかなかったようですが、夜になるのを待って、まだ若い、駆け出しの宗教家であるイエス様に指導を受けようとしてやってきました。何とか、プライドを捨てて、このイエスという人物から、自分の信仰生活では満たされないものを、満たしていただくとしたんですね。自分の立場から離れて、一歩イエス様に近づいたのです。そうすると、イエス様が、どんな役割を負った方であるか、直接聞くことができました。

このヨハネによる福音書には、ニコデモはこのあと、2回登場してきます。1回目は、7章で、ユダヤ人の指導者たちが、イエス様を逮捕しようとした時、本人から事情を聴いて、事実を確かめなければ、簡単に結論を出してはいけない、という趣旨のことをニコデモは述べて、イエス様を弁護します。そして19章では、イエス様が十字架の上で死んだ時、アリマタヤのヨセフが自分の墓に引き取りますが、そこに、ニコデモも没薬と沈香を混ぜたものを持って現れ、葬る準備をします。結局ニコデモは弟子になったようです。ただ、今日の福音書では、ニコデモがどんな決断をしたかは書かれていません。

ところで、今日の福音書の最後に出てくる、16節の言葉は、とても有名です。

「神は、その独り子をお与えになったほどに、世を愛された。独り子を信じる者が一人も滅びないで、永遠の命を得るためである。」

この言葉さえあれば、ヨハネの福音書の大切なことはこの聖句にまとめられている、とされています。

しかし、ニコデモが抱えていた問題。そして、パウロが訴えていた問題。「人間は、どうすれば救われて、神の国に行けるのか。律法を守ることによってか、イエス様を信じる信仰によってか」という問題に対する答えは、その後の17節に書かれている、と言えるでしょう。

「神が御子を世に遣わされたのは、世を裁くためではなく、御子によって世が救われるためである。」という言葉です。

人間はだれも、完全に正しく立派に生きることなんかできないのです。間違っ、いつも失敗ばかりする人間だけ、神様は、それを赦して、いつも愛してくださっているから、私たちはそれを喜んで生きているのです。

イエス様は、人を叱り付けて、正しい事を行う競争をさせるために来られたのではありません。罪を犯して、それを嘆いている人間を、もう一度立ち上がらせて、「私の切り拓いた神の国への道を、私に従って歩いたらいいんだよ」と救いの道を開いてくださるために来られたのです。

私を介護して、いつも正しく導いてくださるイエス様を誇って、頼りにして暮らすこと。それが信仰による義、洗礼を受けたものの生活だ、ということだろうと思います。